道

声楽家（ソプラノ）・新田児童館職員
岩住　久未

皆さんにとって音楽はどんなものですか？

綺麗な音、迫力のある演奏。うるさいと感じる人もいると思います。私は嬉しい時、悲しい時、辛い時、何度も何度も音楽に助けられてきました。それは聴いている時だけではなく、演奏している時にも感じます。

本番前、ある打楽器奏者に「なんで君はそんなに緊張しているんだ？音楽は楽しいものだろう？」と言われたことがあります。その時はその言葉の意味はわかりませんでしたが、10 年後のステージでこの言葉を実感することになりました。

私は幼少期から良く言えば天真爛漫で、悪く言えば人の言うことを全く聞かない子で、音楽は好きだけどレッスンが苦手でピアノもすぐ辞めました。小学２年生に再びピアノを始めますが、レッスンに行っても真面目にやるわけでもなく練習もせずに先生の家で寝たこともありました。楽譜もまともに読めない私が音楽を好きだと気がついたのは中学校の吹奏楽部でした。それまで他の人と様々な楽器で演奏する機会はなく、合奏練習やコンクールを経て「アンサンブルって面白い！！」と感じるようになりました。中学２年生からは仙台ジュニアオーケストラに入団し、吹奏楽部にはない弦楽器の音の豊かさや繊細さ、緊張感を経験しました。当時は打楽器奏者になりたい！オーケストラで演奏したい！と夢見ていましたが、高校進学時、志望校の先輩の演奏を聴き、自分との技術の差に気付かされ、打楽器奏者の夢を諦めました。

勉強もできない、そうかと言ってピアノも上手くない。その時、ふと頭に浮かんだのが「久未ちゃんは歌が上手だね～」と周りの方に褒められた言葉でした。自分に残っているものは「これだ！」と思い、高校生から声楽を始めました。そこから順調に進んだ訳ではなく、大学に入った時は自分が井の中の蛙だと思い知りました。なかなか上達しない自分の歌が嫌いで「なんでこんな声なんだろう･･･」「技術もないし下手くそ」と、どんなに練習しても楽しくない日々が続きました。学部３年時の大学オペラ(大学院生がキャストとして出るオペラ)で舞台裏スタッフとして袖からオペラを見た時、先輩たちの真剣な舞台がとても身近に感じ「私も舞台に立ちたい！」と思い、大学院への進学を決めました。大学院入学と同時にコロナが流行り始め、大学オペラの１年目では距離を保ちながらの演技とピアノ伴奏のみ。２年目には距離を保ちながらの舞台でしたが、念願のオーケストラと演奏する公演となりました。自分が舞台裏で見たオペラとは違う形式でしたが、オーケストラと共に演奏することの難しさを感じながらも、自分の声に少し自信をもって歌えた嬉しい舞台でした。

大学院修了後、仙台に戻り声楽を続けるため仕事を始め、以前から目標にしていた演奏新進演奏家育成プロジェクトオーケストラ・シリーズのオーディションを受けることにしました。

大学には練習室があり、好きなタイミングで練習出来たのが一変し、仕事をしながら練習をする生活に慣れるまで本当に時間がかかりました。オーディションは不安と緊張で何も記憶に残っていませんが、ジュニアオーケストラで打楽器を演奏していたステージで歌うのは不思議な感覚でした。無事オーディションに合格し、令和５年２月４日の演奏会に出演することが決まりました。本番前の２日間のリハーサルとゲネプロから本番はあっという間に時間が過ぎていきました。リハーサル中はオーケストラと合わせることで精一杯でしたが、回を重ねていくうちに緊張もほぐれ、演奏中聴き取れなかった音が１音ずつ増え、音に包まれていくような感覚で満たされました。「今、すごく楽しい！」その時初めて打楽器奏者の言葉を実感しました。本番を振り返ると未熟な部分もあり課題も見つかりました。

私が音楽の道に進んだのは、音楽の関わり合いだけではありません。子ども劇場の活動の一つである親子で楽しむ生の舞台鑑賞、子どもたちで作り上げた人形劇、森で遊ぶデイキャンプや自然観察によって感性が養われました。さらに人との出会いにより今の自分があります。コロナ禍で姿を消したイベントも今は以前のように戻りつつあります。ぜひ本物を見てたくさんの体験をしてください。きっと素敵な道につながると思います。